

# B助産院の自宅分娩の 助産録回顧調査による安全性の考察

村上真理<sup>1)</sup>、田川紀美子<sup>2)</sup>、前原英子<sup>3)</sup>

1) 広島大学大学院医系科学研究科  
2) 広島大学大学院医歯薬保健学研究科博士課程後期  
3) れいこ助産院

目的：B助産院の自宅分娩の助産録回顧調査から安全性を考察すること。

方法：対象は2008～9年の助産録68例。

分析は項目の記述統計量を算出し助産業務ガイドライン（以下GL）で考察した。  
広島大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得た（E-360-1）。

結果：数値は平均（最小-最大）。単位無は事例数。全事例嘱託医療機関を受診し、  
助産師2人が対応した。

表1. 妊婦の基本的属性

	n	(%)	平均	最小	最大
初産婦	13	(19.1)	年齢 (歳)	32.5	25 40
経産婦	55		身長 (cm)	158.2	148 170
第2子	26	(38.2)	非妊娠時体重 (Kg)	51.4	40 60
第3子	21	(30.9)			
第4子	7	(10.3)			
第5子	1	(1.5)			

妊娠期：体重増加9.0 (2.9-15.0) kg  
感染症はGBS4、カンジダ3

分娩期：所要時間5時間26分 (43分-30時間20分) 週数39週4日 (36週1日-41週5日)  
陣痛発来56、前期破水12 (羊水混濁7)

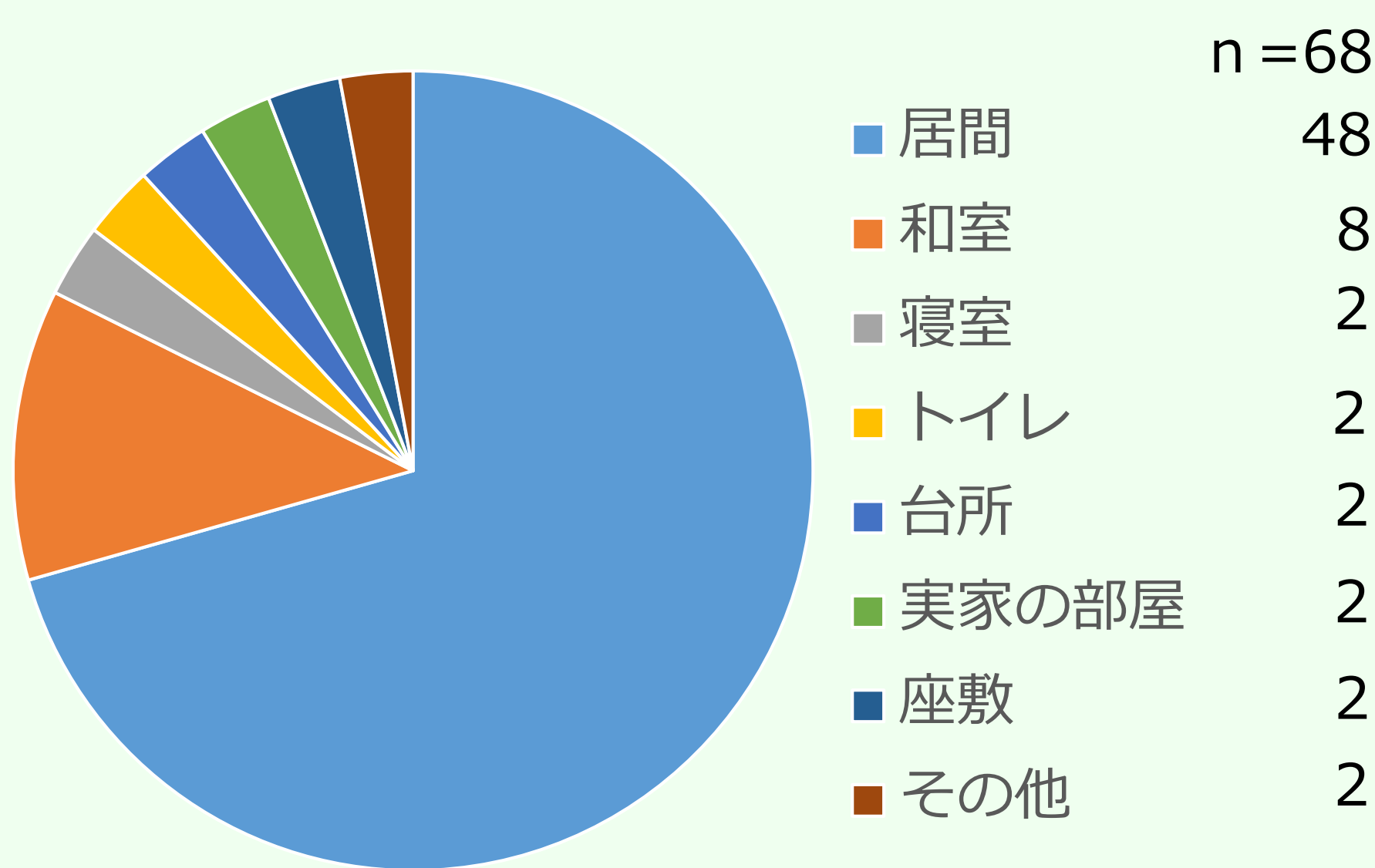


図1. 分娩場所

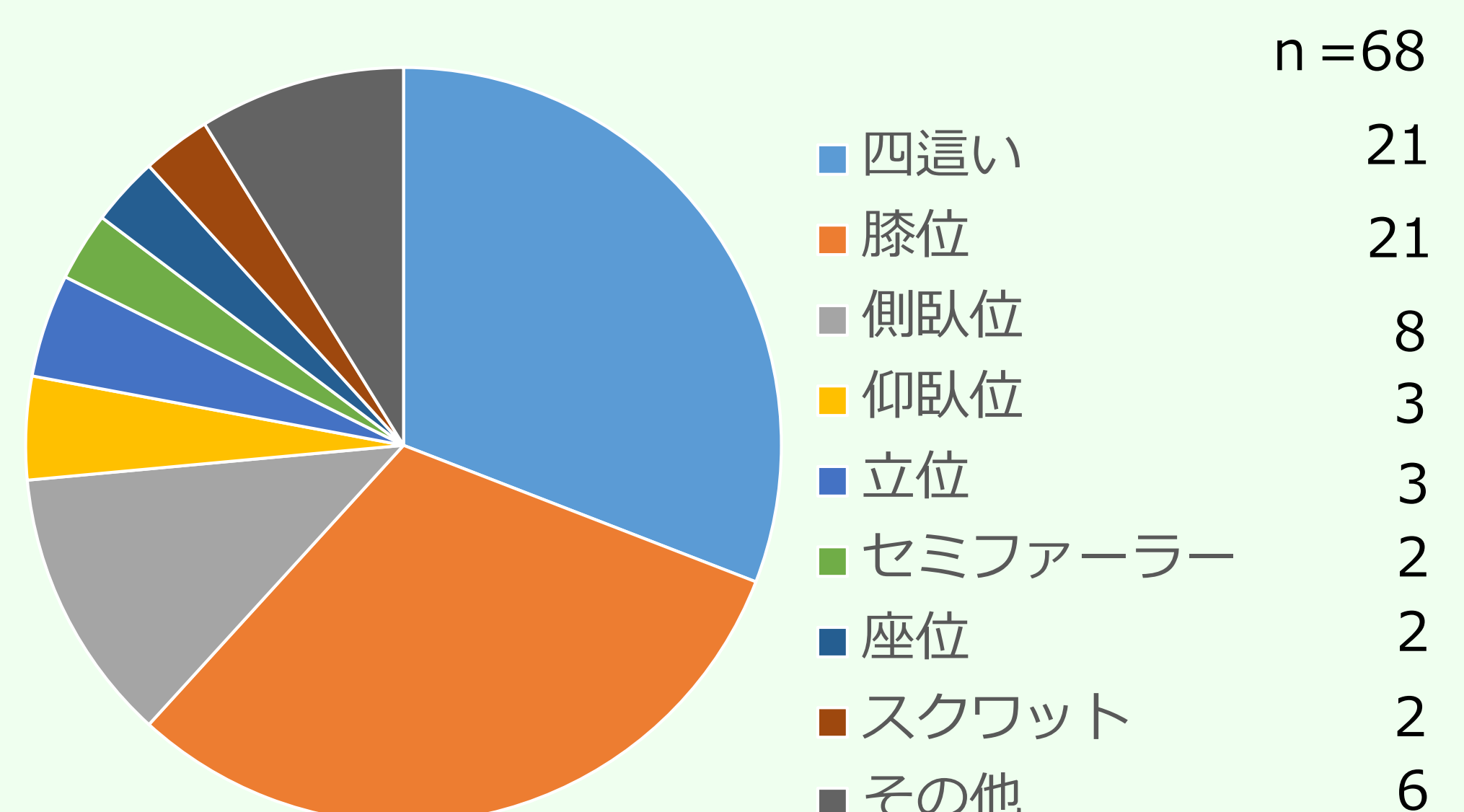


図2. 分娩体位

被膜児9。会陰裂傷無34、I度27、III度1。膣壁裂傷1。  
胎盤540.3 (290-750) g、臍帯60.4 (35-78) cm。臍帯巻絡有22。  
出血234.3 (100-640) g、搬送1 (会陰III度裂傷)。SpO2計測せず。  
出生直後の新生児期：体重3119.9 (2270-3720) g、身長49.7 (46-52) cm、  
頭囲32.3 (29.3-34.8) cm、胸囲32.3 (27.8-35.0) cm、  
Aps 9.6 (5-10) / 10 (9-10) 点。体温36.4 (35.0-38.5) °C。  
早期新生児期：平均6日訪問。体重2945 (3020-4380) g、体温36.8 (35.7-39.5) °C、  
心拍118.0 (60-150) 回/分、呼吸43.1 (36-64) 回/分。  
Bil 14.9 (13.0-17.7) mg/dl。信念でVK2拒否5。搬送2 (黄疸)。  
産褥早期：平均6日訪問。子宮底は臍恥中央～触れず。  
早期頻回授乳で産褥1～3日に射乳有。外陰部腫脹13と脱肛2。全例紫雲膏塗布。

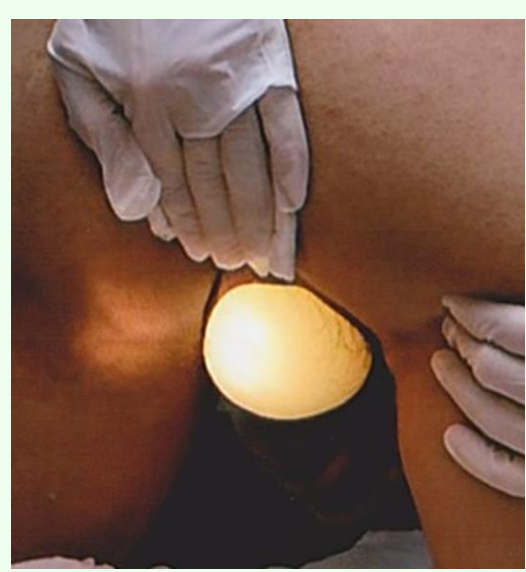


図3. 被膜児



図4. 出産直後の様子

(写真の掲載につきましては、個人の承諾を得ています)

考察：医師と相談し管理したのは、妊娠36週を1、身長150cm未満1、頻産婦1、  
GBS4、羊水混濁7、41週以降4、500ml以上出血1。今後の課題として、助産師数の  
確保、産婦の急変時に備え血圧・脈拍・SpO2自動計測装置の準備、新生児のパルス  
オキシメータ装着と温め乾いたバスタオル・帽子・吸湿発熱毛布・熱伝導マットでの  
保温準備、VK2拒否者への文書による説明と同意を行う。更に、助産師の観察と判断  
の視点がGLに即しているか、急変時に迅速に搬送できる体制かを、協働する助産師  
や嘱託医療機関と再確認する。アドバンス助産師として自己研鑽し、嘱託医療機関と  
連携し、GLに準じた安全なケアを提供する。

結論：68例の助産録から安全性を考察した。今後も嘱託医療機関と連携しGLに準  
じた安全なケアを行い助産録の回顧調査をすすめて安全性を検討する。

今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。



広島大学

